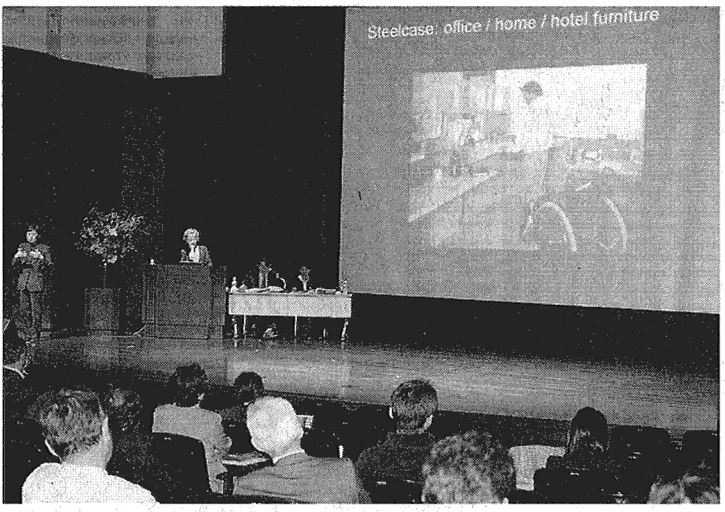
UDの意義再確認

県、導入10年で国際シンポ

米研究者ら講演

浜松



県と静岡文化芸術大は十三日、「しずおかユニバーサルデザイン（UD）国際シンポジウム・『暮らしのリ・デザイン』」を浜松市中区中央の同大で開いた。県のUD施策導入十年を記念したシンポで、県内外の企業、福祉関係者や市民ら約二百人が聴講した。

UDを提唱した米国の建築家ロン・メイス氏と活動を共にしてきたメイスUD研究所のレスリー・ヤング部長が記念講演を行い、左右どちらの手でも使いやすいはさみなど欧米でヒットしたUD製品の数々を紹介。「人間はデザインの力を駆使し、さまざまな障害を克服できる。デザインを通じ、世代を超えてすべての人々と、人間としての価値観や喜びを共有していきたい」とUDの社会的意義を示した。

海外のユニバーサルデザインの導入事例などが報告されたシンポジウム＝浜松市中区の静岡文化芸術大

基調講演した評論家の大宅映子さんは「世の中にはまだ、利用者にとって分かりにくいデザインが多くある」と指摘し、「一人一人が『これはおかしい』と言う強い心と、障害を持つ人々を助けようというやさしさを持つことが、よりよいデザインを生むことにつながる」と呼び掛けた。

企業の事例発表では、県のグッドデザイン賞を受賞したリムコーポレーション（浜松市北区）の竹塚直久社長が、携帯電話の文字表示用ソフトウエア開発時の理念や工夫を紹介した。自動車や住宅メーカーの開発担当者によるパネル討論も行われた。

冒頭で石川嘉延知事は「県はこの十年、UD導入を県政運営の柱の一つにしてきた。完全な定着にはまだ時間がかかると思うが、今後もUDの一層の広がりを期待する」とあいさつした。

十四日は同大で午前九時から、県内企業や県のUDの取り組みを紹介する分科会などを行う。